
アンダルシア・ヴァンツァー

寿甘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンドルシア・ヴァンツァー

【Nコード】

N8799I

【作者名】

寿甘

【あらすじ】

この作品にはグロテスクな表現が含まれています。
いえ――。

この作品はグロテスクで構成されています。

隣人を愛し過ぎた食人者――。
嘔吐きだらけの魔法使い――。
殺され稼業の不死者――。
人畜有害な眼球愛好家――。

絶叫混じりの音楽家――。

なんでも料理にしたがる料理人――。

切り過ぎた花道家――。

朱しか使わない芸術家――。

普通だった女の子――。

その他諸々。

総じて全員狂っている。

そんなお話です。

それは唇の味でした 中　くカニバリスト・カーニバル 序く

娘が意識を取り戻すと、そこは暗闇でした。それは夜空のような神秘的な闇ではなく、行き付く先まで黒のみで構成され、逝き着く先まで黒のみで構築された暗闇。人間の負の感情さえも飲み込んでしまうような本当の暗闇——「『死ぬ』という事は、こんな視点なのかな？」と娘は不意に思ったのです。

『ああ、それならば私は死んでしまったのか』とも考えました。しかし、そこに『悔しさ』とか、『悲しさ』とかの感情が一切無かったのです。それもそのはず——あの朦朧とする意識の中、一瞬だけ見えた男を思い出すと納得できました。

自然災害のような男。

それは偶然に私を犯していった。
それは突然に私を蝕んでいった。
それは忽然に私を殺めていった。

「ああ、納得しました」

娘は呟きました。それは諦めでも皮肉でもなく、心の底からの言葉でした。だって自然災害は罪には問わせれない。只単に私の運がなかったただけなのだ。それならば納得。死ぬ事にも納得。——そう思えたのです。

「納得されたら困るよ」

真正面から聞き覚えのある声が聞こえました。その落ちつきのあ

る口調なのに、どこか人を不安にさせる声——あの男です。

聴覚が正常に戻ると同時に彼女の全ての感覚も正常に戻されていきます。両腕は『何か』を持たされながらテープとロープでグルグルに固定され、口は気絶してたからか涎を垂らし、視界は布のような物に遮られ、足は裸足の状態ですが自由が効きます。

背中に壁を、足元はフローリングの感触を感じ、此处が家の中であると分かりました。

『ああ、私はまだ生きている』。娘は安堵しました。先程の『死の実感』はどこへいったのやら……人とは矛盾だらけです。しかし、その『生の実感』は同時に『恐怖』を呼び起こすのです。身体は恐怖で硬直し、思考は恐怖で曖昧になり、これから起こりうる『恐怖』に恐怖しました。

その中でも身体とは正直なもので、恐怖のあまり娘は失禁してしまったのです。それを見て、その男はこう言いました。

「『身体は正直だね』なんて台詞は成人向けの雑誌でしか見た事になかったが、まさか自分がその台詞を言うとは思わなかったよ。はっはっ！ 自分の変態加減に吐き気がするね！ 良いかい？ 言っちゃうぞ？ 変態と言われようが言っちゃうぞお？ 『身体は正直だね』？」

そう言う男は本当に楽しそうに笑いました。その声は娘の鼓膜をズタズタに切り刻む様に響くのです。それにまた恐怖して、それでもまた聞こえて、そしてまた恐怖する——怖いよ。

不意に男は笑いを止め、此方に近づいてくるのが分かりました。視界は塞がれてるのに分かってしまうのです。それはその男自身の存在の濃さというべきなのでしょう。上手い言葉が見つかりませんが『感じ』てしまうのです。

足は自由に動かせるのに、体が動きません。娘は胎児のように背

中を丸めてガクガクと震えることしかできません。——きっと目の前には男がいるでしょう。その存在をヒシヒシと感じます。

そして不意に太股辺りを指で丁寧になぞるような刺激を感じました。その突然の刺激に娘は『ひっ……！』と声を出してしまいました。齢十四歳の娘には感じた事の無い刺激だったでしょう。娘は困惑しました——そしてやはり恐怖しました。

「ん……甘いね。君はお菓子が好きだろう？ しかも、これは……チョコだね！ ははっは！ 確かにチョコは疲れた時には良いけど摂取し過ぎだ。この年の女の子は甘い物ばかり食べてしまうからね。もつと野菜と肉を食べなさい！ いいね？」

それは男が娘の尿を舐めて言った台詞でした。その異常な行動とは不釣り合いに、いつも母親から言われてる台詞に娘は少し、本当に少し安堵するのです。

……母親？ そう。娘の母親はどうしたのでしょうか？ 父親はどうしたのでしょうか？ 気絶した時間はどれくらい分かりませんが、短く見積もっても二十一時は回っています。その時間なら二人はもう家に居る筈なのですから。娘はその唐突な、けど当然の質問を震える声で問いました。

「マ、ママとパパは……どうしたんですか………？」

「んー？ ママとパパかい？」

「は、い……」

「……………」

男は答えてくれません。その沈黙が彼女を最悪の展開を想像させます。

『パパとママはもう殺されているのではないのか』と。それは至極当然の考えです。この異常者なら殺りかねない……いや、殺らな

い方がオカシイ。けどそれを聞き返せない。だってそれを聞いたら……。

「んっふふ。生きてるよ」

「え？」

それは意外な答えでした。しかしその答えを聞いても安心なんてできません。今度は声を荒げながら娘は言います。

「ど、どこに居っ……！」

「待った待った！ 駄目だよ。直ぐに怒っちゃ駄目だ。やっぱり君は栄養が偏ってるな……よおしっ！」

そう言つと男は、娘をお姫様抱っこして――。

「食事にしよう！ 私のしがない料理で申し訳ないが、栄養だけはバツチリさ！ んっふふ。味に関しては目を伏せてくれよ？ それと、申し訳ないが君も手伝ってくれないか？ これは楽しくなってきたぞお」

そう言つたのです。

そして、鼻歌交じりに男は娘を抱えながら歩き出しました。

その時、初めて娘は自分の両手と一緒に固定されてるものが、刃物だと分かつたのです。

～ 続く ～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8799i/>

アンダルシア・ヴァンツァー

2010年10月11日01時58分発行